

まちとつながり

茨城県
東茨城郡
茨城町

Sun 19

Autumn 2026



錦秋（きんしゅう）　季を追う様に　傾く陽光

郷々の暮　豊饒に包まれる

間（あわい）　知の芽を育み　余を巡らせり

文　茨の地に　彩景（さかげ）と智慧をもたらす

Sunは　茨城町と　ゆるやかにつながる　いくつもの縁を

人々の暮らし　情景と共に　綴り伝えていきます

撮影場所:駒場地区

茨城県 東茨城郡 茨城町
Sun 19
Autumn 2026

Contents　目次

03 特集 一歳月の鼓動
－伝統文化は生きていく
09 「化け顔」 望月滋斗
11 まちで暮らす人 まちを想う人
17 連載　マチのケシキ
18 編集室から



Cover
“二つの路”
夏の日の夕刻　差し込む木漏れ日が
二つの小路を照らしています
あなたはどの路を行くのですか
目の前に立つ木々から
そんな言葉が聞こえたような気がしました

特集

歳月の鼓動

――伝統文化は生きていく

構成・文＝川チオミ
写真＝石川聖太［P3-6］アラタケンジ［P7-10］

夏も盛りのこの日、新調された山車が
二〇年ぶりに旧水戸街道の宿場町を巡ります。
沿道には、その勇姿を一目見ようと集まる小幡の人々。
山車の上ではおかめ、ひょっとこ、狐に獅子が舞い
両袖には、額に大汗をかきながら笛や太鼓、鉦（かね）を鳴らす囃子手の姿。
祭りの雰囲気に目を輝かせ、一生懸命に山車を引っ張る子どもたち。
たった一台の華やぎが見る人の目を惹きつけます。
いつもは静かなそのまちが、賑わいと再会に満ちる玉響の時。

戻ってくる場所

茨城町小幡地区の「小幡ひょっとこ囃子保存会（以降、保存会）」は昭和元年に設立され、今年で一〇〇周年を迎えました。会長の小林俊也さんや副会長の皆藤優翔（ゆうと）さんを中心とする保存会のメンバーは、この節目に長らく途絶えていた八坂神社の祇園祭に合わせた山車の曳き廻しを復活させました。近年、伝統芸能や祭りは継承が困難だという話をよく耳にしますが、小幡地区は少し様子が違います。設立から長らく、保存会は成人男性だけの組織でした。一時期、存続が危ぶまれたことをきっかけに、地域のみんなで郷土芸能を守ろうということになりました。大人と一緒に地区の子どもたちも保存会の活動に参加するようになり、多い時には三〇人ほどの子どもたちが参加したのだそうです。当時の子どもたちも大人になり、今では若手を静かに見守りながら、力強く会をサポートしています。

「子どもの頃によい思い出のない場所に人は戻ってきませんから」と会長の小林さんは語ります。小林さんもかつて山車の上で舞う大人たちの姿に魅せられた一人。今は会長として若手たちをまとめています。「小幡の保存会はおかげさまで様々なところから公演の依頼があります。若手からベテランまで合わせると会員は三〇名ほど。中学生以下の子どもたちは一〇名ほどいますね」。

現代の伝統を創る

小幡らしさを、物語に

一〇〇年目の挑戦

存続の危機を乗り越え、今も活発に活動を続ける保存会にある大きな話が舞い込みました。二〇二六年、茨城町が町政七〇周年を迎えると同時に、町民のための新しい文化交流会館「いばSUZホール」も竣工しました。この新しいホールの柿落(こけらお)としと併せて開催される記念式典の冒頭で、新しい段物を上演してはもらえないだろうか、という町からの依頼でした。

段物というのは物語性のあるひとまとまりの囃子の演目です。既存のお囃子と、おかめやひょっとこなどの仕草を組み合わせてひとつの物語を作り上げます。古くから伝わる段物もあれば新しく作るものもあり、その時々の演者によって少し内容を変えながら上演しているのだそうです。今回、新作をつくるにあたり提示されたテーマは「そだてる」。人や文化、まちのこれからに相応しい物語にするにはどうしたらよいのだろうか…そこで白羽の矢が立ったのは、過去に本誌でも取材させていただいたショートショート(*)作家であり、小幡地区出身の望月滋斗さん。保存会副会長である皆藤さんの同級生でもあります。

七月某日、保存会の拠点である小幡区民センターの広間に置かれた座卓の上に一台のパソコンが乗っています。画面の向こう側にいる望月さんを囲うように座るのは保存会相談役の皆川元生さんと副会長の皆藤さん。二人から「親から子へと受け継がれる小幡らしい人の繋がりを物語に編み込んで欲しい、見ている人がクスッと笑えるにこやかな作品にしたいと考えています」という思いが語られました。それから、どんなお面がありどんな個性や役割があるのか、これまで保存会が上演してきた段物の内容やその中で使われる小道具についてなど、会が継承してきたものの一端が望月さんへと伝えられました。「もちろん保存会の存在は知っていましたが、詳しいことはよく知らなかったので勉強になりました。お二人のお話を聞きながらなんとなくイメージも湧いてきました(望月)」。

会議がひと段落した頃、元生さんのスマホが鳴りました。「何?今からくんの?気をつけてきてね」。電話の主は、今年新調した山車に掛ける緞帳(どんちょう)を制作した来栖崇子さん。これから山車完成のお祝いを渡しに来るという連絡でした。




ひょっとこ面[1980年代]





上から：新たな山車の上で奏でられるお囃子。笛と太鼓の音色が街道に響く／練習場所にしている小幡区民センターでの打ち合わせ。望月さんと皆藤さんはこの日が学生以来の再会／壁には過去のお祭りのポスターが



*:800～4000文字程度の短編小説







辿る縁 編まれる物語

世代を超えて繋ぐもの

区民センターを後にし、ある場所に立ち寄りました。入り口には皆川商事と書かれた看板。出迎えてくださった皆川重孝さんは、保存会の存続が危ぶまれた際に小幡区長らとともに立て直しに奔走した人物の一人。今回新調した山車の作業場として、だかつて仕事で使用していた倉庫の一部を保存会に貸し出しています。そこに一台の車がやってきました。

降りてきたのは石岡市の獅子頭職人である来栖保さんとその妻であり、祭り衣装や山車の幕を製作する職人でもある崇子さん。「いやー、何年ぶりだろう?お元気そうで何よりです～」。久しぶりの再会を喜びながら倉庫の中へ。目に飛び込んできたのは、鮮やかな緞帳をまとった一台の山車。車体は艶やかに輝き、堂々とした姿を見せています。

「他所から譲ってもらったもので、祭りに向けて会のメンバーで塗り替えなどの手直しをしました(皆藤)」「いやー、本当に大変そうだったよ。会の子どもらが毎週毎週来て、一生懸命ヤスリ掛けをしたり雑巾で拭いたり。暑いから休憩しなって言っても全然聞かなくて。こちらが心配になるくらい熱心に取り組んでいましたよ(皆川重孝)」「本当に立派ですね～。重孝さんとはもう随分長いお付き合いだし、私も歳だし大変だからもう作らないって言ったのに、元生さんが強引に頼むもんだから(笑)、あなたも今度いらっしゃい(崇子)」「はい、ぜひ僕も行ってみたいです(皆藤)」。

そんな会話が繰り広げられるすぐそばで今年初のセミが鳴き始め、小幡に本格的な夏がやってきたようです。




おかめ面[2000年代]



上から：思い出話に花を咲かせる皆川重孝さんと来栖さん夫妻／出車の仕上がりを見て修繕の様子を尋ねる／廻り舞台の動きを確かめる重孝さん／山車の前で一枚





上から：なんとか赤子を笑わせようとするひょっとこ／顔が一変し赤子は泣き止んだ／おかめ役の最年少は5歳の女の子







上から：お囃子の音色に合わせしなやかに舞うおかめや狐／舞台上で円座を組み当日の動きを確認する／本番前でも子どもから大人まで笑いが絶えない



新作、動き出す

七月下旬のある夜、町役場前に保存会のメンバーが集合しています。無事に祇園祭を終えて間もないこの日、新作を披露する舞台の下見にやってきました。供用開始前の施設に入れるとあって、どこか浮き足立った様子の一同。しかし、裏口からホールの中に入ると一瞬で演者の顔に切り替わります。舞台の広さや音、どんな演出ができるかを次々確認をする姿から、これまでこなしてきた練習と経験がうかがえます。しばらくして小林会長からメンバーへ新作『化け顔』の筋書きが手渡されました。「ここは、笛の音でうまく表現できないかな」「この日は誰が出られんだっけ？」「この役は母親経験者がいいんじゃないか？」など、次々に意見が出されます。一人ひとりの頭の中でイメージが膨らんでいるようです。

八月下旬、約一ヶ月の練習を経てリハーサルの日がやってきました。客席では原作者の望月さんがその姿を見守ります。三回のリハが行われ、回を追うごとに感覚を掴み、完成度が上がっていきます。最終リハのあと、前々会長の村田英一さんが声をかけてくださいました。「昔『オカメヒョットコ』って段物があってね、子育てがテーマの似たようなお話だったんだけれども、子どもの頃に見たきりでもう五〇年くらい経つかな。今度の新作はそれを思い出すね」「『オカメヒョットコ』のことは聞いていましたが古い作品なので詳しくは知りませんでした。新作は望月さんとLINEでやり取りしながら、内容を詰めたオリジナル作品です。古い演目に似ているというのは面白い発見でした（皆藤）」「普遍的なテーマですし、今回それを突き詰めた結果、人によっては古い段物のリバイバルにも感じられる作品に仕上がったのかもしれません。小説だと、文章ができた時点が完成で、変わりようがないですが、段物はその時々で形を変えて残っていくので、生きているものを作ったという感じがしますね（望月）」。

舞台で化ける

九月六日、午前十一時十五分。保存会メンバーが続々と控室にやってきます。演出の最終確認をする隣でトランプが始まり、別のテーブルでは式典の冊子を眺めながら談笑しています。気心知れた家族のような、親戚の集まりのような雰囲気です。「いつも本番前はこんな感じで、みんな好きなことをしています。今日は僕が一番緊張しているかも（皆藤）」。十二時になると一斉に支度が始まります。それぞれ慣れた手つきで衣装を身に纏い、年長者は子どもたちの着付けを手伝います。十五分ほどで支度を終え、舞台袖へと向かいます。

幕が上がると、ピレーリという皆藤さんの笛の音と共に、狐に扮した元生さんが鈴を鳴らしながら舞います。それが終わると、二曲目は狐と獅子、三曲目はおかめが登場。お囃子に合わせてそれぞれの舞が披露され、いよいよ新作の段物『化け顔』が始まりました。赤ん坊を抱いたおかめと、泣き止まない赤ん坊をあの手この手であやすひょっとこ。万策尽きて長老に泣きつくと、一つの黒い箱を渡されます。蓋を開けると、中から煙がモクモクと立ち上り、ひょっとこの顔が一変。その顔を見て赤ん坊は泣き止み、村の人々は大喜び。演目が終わり、演者が舞台に並ぶと、会場からは大きな拍手が贈られました。





狐面
［1980年代］

受け継ぐということ

山車の上の大人たちに憧れていた子どもは、いつしか若い世代を支え、見守る側になっていく。年長者は当たり前のように年少者を気遣い、同じ時間を過ごすうちに、自然とその立場が入れ替わっていく。そこには、同じ地区の住人というだけでは表現しきれない、家族のようなつながりがありました。

先人から次の世代へ、またその次の世代へ。郷土芸能とともに、そうした人と人との関係まで自然に手渡されていく。「伝統文化を守る」というのは、思っているよりもずっとしなやかで、生き生きとしたものなのかもしれません。保存会が一〇〇年続いてきた理由は、案外、そんなところにあるのではないでしょうか。

人が人を想い、一緒に笑い、次の世代を見守る。その営みがあるからこそ、伝統は過去のものにならず、今を生き続ける。小幡の人たちを追いかけたこの夏、そんなことを強く感じました。

化け顔

望月滋斗

とある民家に、赤子の泣き声が響いていた。
おかめは赤子をやさしく抱き、あやしているが、泣きやむ兆しはない。
こうなったら、夫であるひょっとこの出番である。
ひょっとこは部屋をうろちょろしてしばらく思案した挙げ句、
両手で覆い隠した顔面を、赤子の目の前に寄せた。
そして、「いないいなーい、ばあ」という掛け声とともに、両手を開く。
しかし、目が合った赤子は、一段と顔を赤くして激しく泣きわめくのだった。
おかめの呆れた溜め息が、ひょっとこの耳元をなでる。
ひょっとこは首をぶんぶんと横に振ると、もういちど顔面を手で隠し、
「いないいなーい、ばあ」
だが、結果は同じだった。
おかめのますます深いため息で、
部屋の空気が息苦しいものに変わっていく……。
「おーい、帰ったぞう」
そのとき、外に出ていたおじいさんが帰ってきた。
おじいさんのしわがれた手には、見慣れない黒い箱が抱えられている。
「泣き声が町中に轟いとったわい」
そう言って、おじいさんは持っていた黒い箱をひょっとこに手渡した。

「これは……？」
「いいから、開けてみぃ」
ひょっとこは黒い箱に目を落とし、その蓋を開けた。
刹那、箱の中からモクモクと湧いて出た白い煙が、ひょっとこの顔面を覆った。
やがて視界が晴れると、おじいさんがひょっとこの顔を指さして、
満足そうにうなずいていた。ひょっとこは自らの顔に触れてみて、気づく。
――自分の顔じゃ、ない。
その顔は、垂れ目の、やさしい表情をした老爺のそれに化けていた。
「その箱には、狐様のお力が宿っていてのう。この町の人は代々、
それで顔を化かして子どもたちを笑わせてきたんじゃ」
おじいさんは「さぁさ、今のうちに」と言葉を継いで、ひょっとこの背中を押した。
ひょっとこは、今度こそ、と顔面を両手で覆い隠して赤子に近づいていく。
「いないいなーーーい、ばあっ！」
赤子の表情が固まり、沈黙が流れる……。
すると、赤子はぴくりと口角を震わせ、大声をあげて笑いだした。
「きたきた！」
ひょっとこはそれから何度も、顔面を手で隠しては開いて見せた。
そのたびに、エヘヘ、エヘエヘと、赤子があまりにしつこく笑うものだから、
おかめも、おじいさんも、ひょっとこ自身も、だんだんつられて笑ってしまう。
その民家の笑い声は、町中に轟いていた。



小幡ひょっとこ囃子保存会
Youtubeチャンネル　@小幡ひょっとこ囃子保存会

P5～P11 面撮影：小沼渉



まちで暮らす人 まちを想う人

— Feeling × Thinking

故郷の森をつなぐ庭

まちで暮らす人

森のそば屋 清工門 店主　海老澤伸靖

写真＝アラタケンジ　文＝二川ナオミ

海老澤さんは群馬県片品村生まれ。実家では父・清さんと母・八重子さんが民宿を経営し、家にお客さんがいるのは当たり前という環境で高校卒業までの期間を過ごしました。ゲームクリエイターを志す時期を経て茨城に移り住み、飲食店でのアルバイトをしながら父と共に蕎麦屋開業に向けて奔走しました。店は二〇一〇年にオープンし、東日本大震災やコロナを乗り越えて二〇二二年から二代目店主を務めています。

気づいたら蕎麦屋の二代目に

茨城町の農家に生まれたスキー好きの父は、約五〇年前に群馬県片品村へ移住し民宿を始めました。宿は冬になるとたくさんのスキー客で賑わっていましたし、年末に提供する父の手打ち蕎麦は評判も上々でした。たくさんいる父の友人が茨城から来ることもありましたし、尾瀬を目的に訪れる人や学校・部活関係の合宿利用などもありました。そうした環境で育った私にとって、家にお客さんがいるのは自然なことでしたので、子どもが好きそうなお客さんを狙っては遊び相手をしてもらっていましたね。

私自身は高校卒業後、専門学校進学を機に片品村を離れました。父が茨城町での蕎麦屋開業の準備を始めるなどのタイミングが重なったこともあり、学校を辞めて茨城に移り住み、アルバイトをしながら父の店作りを手伝っていました。私が二十歳の年に父の蕎麦屋も無事開業し、茨城の生活にも慣れて何か新しいことを始めようかと考え始めた矢先、今度は東日本大震災が起こりました。アルバイト先は店舗に大きな被害を受け営業ができない状態になってしまいましたし、遠く離れた群馬県片品村でさえ原発事故の風評被害で民宿の利用にも影響が出ました。幸いにも蕎麦屋の方は、建物の柱がずれるなどの影響はあったものの、そこまで大きな物理的被害はなく、新しいことを始めようというのは一旦保留にして、営業再開に向けて本格的に蕎麦屋で働くようになりました。

父と運んだ群馬の森

この店は元々、父の実家だった民家を改装したものです。父は長年、いつか故郷の茨城町で商売をしたいと考えていたようです。どんな店を作ろうか考える中で美しい庭のある店と出会ったのがきっかけで、家族と友人を巻き込んだ理想の店作りが始まりました。今は森のようになっている庭ですが、昔は倉庫があり、アスファルトが敷かれた駐車場でした。ダンプカー四、五〇台分の土を入れ替えて整地し、木々に合わせた土壌改良を行いました。木々や植物は、父が群馬県の山中で見つけ、地権者と交渉し、譲り受けたものがほとんどです。採集と移植は私も手伝いました。父が気に入る木々のサイズは大小様々。山中を再現するため、雪の重みで枝がグニグニと曲がっているようなものをあえて選びます。崖のような場所にあることもしばしばで、吊り下げで運び出そうとしたらワイヤーが切れてしまった、なんてこともありました。苦労して運んできても土が合わずに枯れてしまう木もあり、お世話になっている造園家の方からは「よく根付いたね」と言われます。こうして形になった今も、定期的な剪定や消毒などの手入れは欠かせません。





寄り添いながら、継いでいく

オープンしてすぐは客足もまばらでしたが、続けるうちに常連客も増え、ここ数年はたくさんのお客様に足を運んでいただけるようになりました。二〇二二年に父から経営を引き継ぎましたが、店は変わらず家族三人で営業しています。八四歳の父は、今でもふらっと雪山にスキーをしに行くくらい元気で周りの人間がついていくのが大変なほど。体が動くうちはお願いするくらいが丁度いい距離感だと思っています。いつの日か、今の役割分担が難しくなった時には、状況に合わせてよりよい形に変えていけばいいと思っています。

土地の見え方、感じ方は人それぞれ

私の故郷である群馬県片品村は標高が高く、夏はとても涼しい場所です。ですが、冬は雪が深く、毎日毎日雪かきに追われます。屋根に積もった雪はストーブの熱で一旦溶かされてはまた凍るので、その分厚い氷を叩き割る作業は本当に大変です。一方、父の故郷、茨城はとにかく夏が暑い。暑いですが、冬には雪かきの必要がほとんどありません。それにどこへいくにもとても便利な場所だと思います。片品村は近隣の比較的大きな町まで出るのに、車で三、四〇分かかります。公共交通機関だと本数も少ないのでそれこそ一日がかりです。交通費も馬鹿になりません。茨城町は車さえあれば三〇分で海にも山にも、映画館にも行けるんですよ。近くに空港もあるし、フェリーにも乗れる。私からしてみれば、とても便利な場所だと思います。暮らしやすいので個性がないと思われがちですが、その利便性こそがこの場所の強みなのではないでしょうか。





森のそば屋 清工門　茨城県東茨城郡茨城町駒場1619　029-292-5715
soba-ibaraki.com



「これでいい」、これくらいが自分らしい

まちを想う人
going46 代表　横山角栄

文＝ホシカワリエコ

横山角栄さんは一九七四年、茨城県日立市生まれ。二〇代で横山電工株式会社を立ち上げ、水戸市を拠点に事業を展開。日本三名園の偕楽園をはじめ各地の公共施設で、プロジェクションマッピングやイベント演出など、電気工事業の枠を超えたエンターテインメント事業を手がける。

生まれは日立多賀です。国道沿いに住んでいたので自然の中というより、祖父が経営する商業施設やその界隈で遊ぶことが多かったですね。四歳の頃に両親が離婚し、茨城町に引っ越してきました。母親が工場の寮を管理していたので「大家さんの息子」と言われ、かわいがってもらいました。

商売の原点は「虫売り」

茨城町は自然が多く、小学校時代は弟と虫取りに夢中になっていました。当時、虫を買い取ってくれるおばちゃんがいて。週末は高く売れるとわかると週末まで待ち、おばちゃんに売りに来た子から先に買い取って、まとめ売りしていました(笑)。学校ではふざけているほうが楽しいし居心地がいいので、キャラを作るようにしていたんです。勉強ができても何の得にもならない。みんなと一緒に怒られるほうがいいと、あえて勉強も宿題もやりませんでした。夏休みに先生から交通安全標語ポスターを頼まれたときは「先生、やってもいいけど他の宿題やらなくていい?」と取り引きをして(笑)。ポスターは県で入賞したんですよ。母親や先生は、勉強は無理にしなくてもいいと理解してくれていました。当時、母子家庭は珍しかったんですが、町の環境のおかげか気にしたことはありませんでした。ただ「お父さんと釣りに行く」というのがうらやましかったですね。うちには釣竿もなくて。

六年生のときに父親ができました。子どもの面倒をよく見てくれる運動神経が抜群な人で、モトクロスバイクを教えてもらい夢中になりました。中学校に上がってからもキャラは変えず勉強はしなかったので「あれ、俺いつから落ちこぼれになった?」って(笑)。クラスで好きな子を聞き出してはその子の写真を手に入れて売ったり、交換日記の受け渡し役を頼まれたりしていましたね。

アウェイで磨いた処世術、青い釣竿の教え

高校は誰も知り合いがいないところに行きました。当時は学校が荒い時代で。男社会って引けないじゃないですか。弱くても戦わないとその時点で立ち位置が決まる…きつかったですね、武闘派じゃないんで(笑)。「攻めてばかりでも引いてばかりでもダメ。薄く付き合うだけでは仲間はできない。自分の立ち位置を保ちながら意見を通す」——これは商売でも一緒かなと思います。アウェイでも一人で知らない世界に行ってもなんとも思わない。中学の終わりから高校時代の経験が、今の自分の基盤になりましたね。



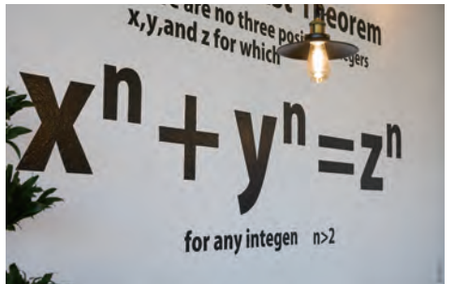
卒業後は先生に勧められた仕事につきましたが、自分に合わなくて研修途中で帰ってきてしまって。電気工事業の会社を営んでいた叔父が見かねて、面倒を見てくれることになりました(笑)。叔父は欲しかった釣竿を買ってきてくれた人なんです。周りの大人は「これで買って」と小遣いをくれましたが、近くに店はないし子どもだから遠くまで行けなくて…。あのときの青い釣竿を覚えています。うれしかったですね。叔父のところでは「当たり前にやるだけじゃダメ、プラスアルファの気遣いが大事」ということを学びました。

弁当十二個、光の演出家になる

バブルが崩壊し、不景気の波がきた頃、将来を考えて二五歳で独立しました。地元で仕事を取り合い義理を欠くなら大海原に出ていこうと、二七歳で水戸市に会社を構えました。人とのつながりで仕事を広げ「ヨコデン」だったら機動力でできると言われるようになって。組織として人がいる以上は仕事を取らなければと、スーツを着てより大きな仕事を目指して動いていましたね。



二〇一五年、同級生と飲んでいるとき、水戸のプロジェクションマッピング事業を都内の企業が受けたと聞き「ヨコデンでできるんじゃない?」となり、すぐにプロジェクターに投資しました。ほどなく弘道館のマッピングの仕事を手にしましたが、ギャラは弁当十二個(笑)。でもその現場でカップルが光の中で写真を撮っていて「あぁ、この人たちの人生の一瞬を演出しているんだな」と思って。それからメディア部門の「going46」を立ち上げ、水戸城大手門や茨城県立歴史館のマッピング、偕楽園の光のイベントなどを手がけるようになりました。音響も照明もLEDビジョンも自分たちで組める。それを生かし、乗り入れればどこでもステージになるトラックも作りました。二〇二六年一〇月には複合型デジタルイベント空間「MITO ZEXA46」も始まります。



これが自分のスタイル

昔はスーツを着て営業や経済団体の集まりに出向いていました。でも今は「麦わら」と「短パン」でどこへでも出かけます。雑にしているのではなく「俺だからこれでいい」という裏付けができたんだと思います。

「意志を噛め」という母親の言葉があるんです。意志を見せろ、意志を持ってやれ、ということ。格好つけたいなら覚悟を持て、とも言われてきて。小さい頃から自分の価値観で善悪を判断してきました。「学歴も、何もないやつでも商売はできる。このキャラでもやれてるよ」と言いたいですね。

茨城町について思うのは、涸沼も紫陽花もポテンシャルを生かしきれていないのではないかな。地域の祭りも、人がいないからできないではなく、やれる方法を考えればいい。昔は地域の人が気にかけ面倒を見てくれるコミュニティがありました。こうしたつながりや親しんできたものを、次世代に引き継ぐことが大事なのでは。どうするかは受け取った世代に任せればいいと思います。

going46
going46.jp



“いば3”が町のランドマークに!

2026年9月、茨城町の新しい文化交流会館
“いばSUNホール”がOPENしました!
コンサートや演劇、アート作品の展示などはもちろん
様々な文化活動ができる場所です。
いば3のコンセプトでもある
“ゆるやかなつながり”をきっかけに
様々な文化が生まれる場所になることを期待します!

From Sun –編集室から–

Sun 第19号をお届けします。

伝統ある素敵なお祭り!ページをめくるたびに、祭りの活気や参加した皆さんの楽しそうな熱気がフワッと蘇ってきます。お祭りのワクワク感が読者に届きますように![K_SUN]／長く受け継がれてきた地域の伝統芸能。そこには、先人から受け継いだ思いと、それを次の世代へつなごうとする人たちの姿があります。舞台に立つ皆さんの姿を見ていると、こうした文化が今も続いていることがうれしくなります。これからも大切にしたい、町の宝物です。[SugerⅢ]／私も町外からこの町に移り住みましたが、利便性だけを求めて都会であわただしく生きるより、自然を身近に感じながらも車でちょっと行けばいろいろ出かけられるこの町は「丁度いい」町だと思いますね。[シロクマさん]／土曜日の半日授業。田んぼ道を軽トラの荷台に乗ってゆらゆら揺られながら走ったあの日。子どもの頃の記憶や「マチのケシキ」がふと頭をよぎり、とても懐かしい気持ちになりました。久しぶりに実家に帰ってみようかな。[しげ③]／伝統が続いていく理由は様々あります。その足元に流れる人のつながりは、時代を問わない普遍的なもの。そのことの価値と意味を改めて考え直す時期にきているのでは、と今号の取材を通じて思いました。[YANNA3]

紙面に載せきれなかった写真、取材のお話など、いば3オフィシャルWEBサイトにUPしています。
いば3ふるさとサポーターズクラブ オフィシャルWEBサイト　town.ibaraki.lg.jp/iba3

Sun　第19号　秋号　2026年10月20日発行

企画・発行:いば3ふるさとサポーターズクラブ事務局
［茨城町　町長公室 秘書広聴課］
〒311-3192　茨城県東茨城郡茨城町小堤1080
TEL:029-240-7148　MAIL:iba3@town.ibaraki.lg.jp

編集・アートディレクション・デザイン｜i,D
取材・出筆｜二川ナオミ　ホシカワリエコ　井野優子
写真｜アラタケンジ　小沼渉　石川聖太
絵｜やまなかももこ
印刷・製本｜株式会社光和印刷
本誌内容の無断転記、記載、複写を禁じます。　©Sun all rights reserved.

Special Thanks［順不同］
小幡ひょっとこ囃子保存会のみなさん
望月滋斗さん　皆川重孝さん　来栖保さん　来栖崇子さん



“いば3”ではサポーターを募集しています!!

“いば3ふるさとサポーターズクラブ”は
いばらきまちがつくるあたらしくて
ゆるやかなつながりの場。
設立から10年目を迎え、
会員数は1,000名を突破!
ますます盛り上がる“いば3”と
みんなでつながろう!!!

お申し込みはこちらから
town.ibaraki.lg.jp/iba3

いば3 WEBサイト

文:井野優子
1982年生まれ。茨城町宮ヶ崎地区出身。
散歩とひとり旅と手ぬぐいが好き。
休日はあちこち散策するか
愛猫ししまる(11歳)とごろごろしている。

変わらない景色と変わっていくケシキ
それぞれを大切にしていきたいです。



連載
マチのケシキ

第19回　芋と半ドンと私

文｜井野優子　絵｜やまなかももこ

私が高校卒業と同時に町を出てから二六年が経つ。「マチのケシキ」で思い浮かぶのは、子どもの頃に見ていた景色だ。

当時通っていた小学校では、秋が深まると校庭に落ち葉がたくさん。それを集めて焚き火をした。銀紙に包んだお芋を火の中に入れて、ほくほくの焼き芋をみんなで食べた。授業中に。生徒たちの集中力が切れたので「授業をやめて今から校庭に出よう」と言い出したのは、先生。今思うと、集中力が切れていたのは生徒だけではなかったかも…。

そしてあの頃はまだ、土曜日は半ドン。若い人は半ドンの意味、わからないよね。授業は午前中のみでお昼に下校するから、給食はオレンジ色の三角パックの牛乳だけ。校門にはどこかのおじいちゃんが軽トラで孫を迎えに来ている。家が遠い子だと歩いて片道一二時間はかかるから、かわいい孫らがお腹をすかしっちゃったら可哀想だっぺと思ったのだろう。軽トラに乗るのは孫だけじゃなく、同じ地区の子どもたちも荷台に乗って帰る。体育座りで。地区が違うために私はそれに乗ることはなかったが、大人になってから乗っていた子に話を聞いた。畑と民家と牛舎しかない細い農道を、子どもたちを乗せた軽トラがゆっくり進む。自分の家が近づいたら、手を上げて降ろしてもらうのだそう。軽トラの荷台から見る「マチのケシキ」見てみたかったな。

最近、電動自転車を買った。町の散策用で親族宅に置いてもらっている。車の運転ができない私が、ひとりであちこち自由に行きたい時にぴったり。さて、新しい「マチのケシキ」を探しにいってこよう。

Sun　第十九号　二〇二六年十月二〇日発行　企画・発行　いばらふるさとサポーターズクラブ事務局　iba3@town.ibaraki.lg.jp　TEL 029-240-7148



Sun

茨城町は 北緯36度17分 東経140度25分
茨城県のほぼ中央部に位置します
日本有数の汽水湖である涸沼を湛え
豊富な水と里山に育まれた風土です